

視察報告

第30回東南アジア競技大会 (SEA GAMES 2019)

富田 幸祐 (オリンピックスポーツ文化研究所)

神田 俊平 (スポーツ文化・社会科学系)

尾川 翔大 (スポーツ危機管理研究所)

1. はじめに

第30回東南アジア競技大会(以下、SEA GAMES)が2019年11月30日から12月11日にかけてフィリピンで開催された。SEA GAMESとは1959年にバンコクで開催された東南アジア半島競技大会(Southeast Asian Peninsular Games)を起源とする東南アジア諸国に参加国を限定した2年に1度開催する国際競技大会である。1977年のクアラルンプールでの第9回大会以降は東南アジア競技大会(Southeast Asian Games)に名称を変更し現在へと至っている。アジアオリンピック評議会の傘下の大会であり、現在は11ヶ国から選手が参加している¹⁾。

フィリピンでの開催は1981年、1991年、2005年に続き4度目の開催である。主な会場はクラーク、スービック、メトロ・マニラに設置され、56競技523種目が実施、8750人ほどの選手と役員、1万2000人のボランティアが参加し、5億人の視聴者がいたとされる²⁾。

筆者らは12月4日から7日にかけてメトロ・マニラ及びクラークの会場視察を行った。本稿はその視察報告を行うものである。

2. メトロ・マニラ

フィロイル・フライングVセンター(12/5)

まずわれわれが向かったのがメトロ・マニラの

サヌアンにあるフィロイル・フライングVセンターである。この会場ではesportsが行われることになっていた。SEA GAMESでのesports採用は今回が初めてである。周知の通りesportsはオリンピックでの採用が噂されるなど、スポーツの分野においても注目が高くなっている分野である。すでに2018年のアジア競技大会(ジャカルタ・パレンバン)でもデモンストレーション種目として採用されていたがSEA GAMESでは正式種目として採用された。なぜSEA GAMESで正式種目に採用されたのか。話は2018年11月に遡る。2018年11月20日、Razerの共同創設者でCEOのMin-Liang TanがAlan Peter Cayetano(SEA GAMES組織委員会委員長)とesportsをSEA GAMESの種目に加えることを話し合ったという投稿をFacebookに行った³⁾。このRazerはesports用品(PCや周辺機器、ソフトウェアなど)に特化した会社であり、そのRazerがスポンサー[OFFICIAL ESPORTS PARTNER]となることでSEA GAMESでの実施が実現したのである。実施されたのはDota2, Starcraft II, Hearthstone, 鉄拳7, Arena of Valor, Mobile Legends: Bang Bangの6つである。この内、Hearthstone, Starcraft II, Arena of Valorはアジア競技大会でも実施された。またMobile Legendsはフィリピンにおけるスマホゲームのトップセールスを誇る人気のゲームとなっている⁴⁾。

われわれが会場に着いたのは朝の9時ごろで

あった。すでに10名ほどが開場を待つべく並んでいた。その後もぼつぼつとではあるが観客が駆け付けており、気づけば40名ほどの行列となっていた。その構成も老若男女偏りを感じないものであり、並んでいる最中にはRazerのスタッフが応援グッズや記念品を配布し、かくも esports はフィリピンで人気なのだろうかと感じさせるものであった。ただ並んでいた人に話を聞くと、もちろん esports に対する関心はあるものの、多くの方は無料で入場チケットが入手できたので観に来たようであった。どうやら有料では観客が集まらないために現地では無料で配っていたのである。事前購入をしていた私たちとは違い開場を待つ人たちはみな無料の入場チケットで来ていたようである。

私たちが朝9時ごろに到着したのは、9時に開場すると事前に確認したからであった。しかし待てども開場は始まらない。そこでスタッフに確認するとなんと開場は11時とのことであった。私たちの見間違いか、急遽日程が変更になったのか、その点は定かではないが、この日の日程を考慮す

ると会場に入ることを断念せざるを得なかった。残念ながら esports 観戦は出来なかった。なお今回案内をしてもらった通訳のロッドさんは孫がスマホゲームばかりしていて困っているとのことだった。

(文責：富田)

モール・オブ・アジア・アリーナ (12/5)

esports 観戦を諦めて向かったのが、バスケットボールの会場になっているモール・オブ・アジア・アリーナ (以下、MOAA) である。そこで行われるタイとカンボジアの試合を視察するためであった。

およそ2万人収容可能なMOAAは、2012年に会場された多目的アリーナである。MOAAはフィリピン最大級のモール (日本でいうところのショッピングモール) であるモール・オブ・アジアや遊園地に隣接されている。つまりMOAAは複数の商業施設の一角である。MOAAは、有名アーティストのコンサートや、格闘技のイベント



写真1 フィロイル・フライングVセンター



写真3 MOAA 全景



写真2 開場を待つ観客



写真4 MOAA 入口



写真5 ほとんど観客のいない会場

の会場とされることもあり、2018年には日本のロックバンドのONE OK ROCKがライブを行った。もちろん、フィリピンで盛んなバスケットボールの試合も行われており、大学リーグ戦や国際大会の会場として使用されることもある。

アリーナの中に入り、係の方がシートまで案内してくれる途上で、観客がほとんど入っていないことが目に入った。SEA GAMESは、国際大会ではあるものの、平日にタイとカンボジアの人たちが代表戦を観戦しにフィリピンにまで向かうのは、一苦勞であろう。フィリピンの人たちがタイとカンボジアの試合のためにMOAAの観客席をすべて埋めることも現実的ではない。2019年11月に開催された国際的な野球大会である2019 WBSCプレミア12において、東京ドームで開催された日本代表以外の試合では閑古鳥が鳴くこともあった。国際大会といえども、開催国の試合でなければ、観客を集めることは容易ではないこともあるようである。しかし、2019年のラグビーワールドカップでは、様相は異なったことも記憶に新しい。

われわれはタイ側の客席に座ったので、ベンチに座るタイの選手を眺めていると、そこには、「スポーツ移民」と思われる選手がいることに気づいた。客席に座りながら少し調べてみると、その選手はアメリカで生まれ、アメリカの大学でバスケットボールをしていた経歴をもつ選手だった。しかし、どのような経緯でタイの代表選手になっ



写真6 タイ対カンボジア



写真7 タイの応援団

たのかまで立ち入ることはできなかった。その選手は筆者らが観戦した試合では最後まで出場することはなかったが、しかし、試合に出場している選手に指示を出すという立ち振る舞いが随所に垣間見えたことから、チームの中心選手のようにみえた。なお、帰国してから、タイは決勝まで進んでいたことを知り、動画共有サイトでフィリピンとタイの決勝戦を閲覧したところ、タイチームはその選手を中心として試合を進めていたようにみえた。ちなみに、決勝戦は、フィリピンの試合だったこともあり、ほとんど満席にみえた。

また、タイムアウトで選手たちがベンチに戻ってきたとき、タイのコーチは手で持つことができるサイズのホワイトボードを使って指示を出していた。観客が少ないのでコーチが選手に話している声が漏れ聞こえてきたが、その言語は英語であり、通訳を介して理解している選手や、英語で理解している選手もいたようにみえた。

観客の少ない試合であったが、それでも、われわれの付近に陣取ったタイ側の客席に目をやると、50名ほどの応援団が来ていた。応援団は、タイチームが得点を決めると盛り上がっていた。しかし、第2クォーターが終了すると、応援団は記念撮影をはじめて第3クォーターに入るところには、会場を後にしていた。なにかのツアーの一角にSEA GAMESが組み込まれていたのだろうか。試合はタイチームの勝利で幕を閉じた。

(文責：尾川)

ニュークラーク・シティ・スタジアム (12/6)

前日のうちに、メトロ・マニラから北西約120キロに位置するニュー・クラーク・シティ（以下、NCC）に近いアンヘレスに移動した。この日の調査は、SEA GAMES 2019のために新設されたニュー・クラーク・シティ・スタジアム（以下、NCCS）と、この日の競技種目であるマラソン競技を視察することであった。宿泊地を5時に出発し、会場には7時ごろに到着した。なお、この日のマラソン競技には、カンボジア国籍を取得して東京オリンピック・パラリンピックへの出場を目指している猫ひろし氏が出場しており、その結果は日本でも報道されたようである⁵⁾。

会場に到着して最も目を引いたのは、真新しいNCCSである。前述したとおり、これは、SEA GAMESのために新設されたものである。この施設が建設されたNCCは、フィリピン政府が日本を含める各国の支援を受けながら開発を進めているエリアである。NCCには、行政機能の一部が移転される予定であり、マニラに次ぐ「第二の都



写真8 NCCS



写真9 アクアティックセンター



写真10 asics の入る建物

市」が目指されている。この開発計画は数十年に及ぶ長期的なもので、NCCSは、その中でも先行して建設されたものである。都市開発の一環として国際的なスポーツイベントが誘致され、まずは、NCCの都市としての知名度を高めておこうとしているのではないだろうか。それは、後のNCC

の人口増加の布石になるだろう。そして、これから実行されていくインフラ整備を進めて総合的な都市開発を構想しているように思う。SEA GAMESは、NCCの開発のためにあることは自明のことのようであった。国際的なスポーツイベントが、都市開発の第一陣とされたということであろう。ちなみに、このNCCSの中にはスポーツメーカーのasics社の支社があった。

NCCSでは、主に陸上競技場を視察した。この日に陸上競技場で開催される種目はマラソンのみであったから、満員の観客が座る競技場を見ることはできなかった。しかし、NCCSの陸上競技場はおよそ2万人を収容できるようである。それにしても、国際的なスポーツイベントを開催するには十分なスタジアムであったように思う。

ただ、マラソン競技を観て実感したことの一つとしては、やはりフィリピンは暑かった。われわれが視察した12月上旬も、最高気温が30度を超えていた。マラソンのスタート時刻は暑さに配慮してか早朝の6時であったが、それでも、8時を過ぎるころには太陽に照らされ、気温が上昇していた。ただ、日ごろからこの気候のもとでマラソンをしているのであれば、いささか耐性がついているのかもしれない。

また、NCCSでは、立て続けに国際的なスポーツイベントの開催が予定されている。2020年にはASEANパラゲームと第11回アジア水泳選手権大会の開催が予定されている。2030年には、未定ながらアジア大会の招致の構想をもっているようである。国家としてのレーズンデートルを示すという意味では、国際的なスポーツイベントを開催することは、いまなお1つのバロメータである。

しかし、始まったばかりの都市開発の只中のスポーツイベントであったから、交通インフラについては、これから整備されていくようである。選手や関係者だけでなく、多くの観客が収容される競技場を建設するなら、その移動をスムーズに行える交通網が整備されている必要がある。われわ



写真 11 朝7時のNCCS入口



写真 12 霧が晴れたNCCS入口付近

れが、NCCSの付近に到着したのは、まだ霧がかかる7時ごろであり遠くを見通せる状況ではなかったが、見えたのはスタジアムらしき建物と地平線であった。このとき、はたしてここから帰ることができるのだろうか、という不安がよぎった。そこで、マラソンを観戦し、NCCSにある各施設を見てまわりながら、アンヘレスに戻る方法を探っていた。幸いにして、というより、国際的なスポーツイベントであるから、当然、交通機関も配慮されている。シャトルバスを発見した富田と尾川は一足先にアンヘレスに戻ることができた。神田は付近の野球場に移動したので、その報告については、そちらを参照されたい。

（文責：尾川）

THE VILLAGES (12/6)

野球とソフトボール

上述の通り、マラソンを観戦後アンヘレスへー

足先に戻った富田，尾川と分かれた後，私は同スポーツコンプレックス内のアクアティックセン



写真13 The Villages

ターで行われている競泳の観戦を予定していたため，NCCSに留まった。競泳のスケジュールが発表されたのが直近であったことから，事前にチケットを購入せず当日券での入場予定していた。これまでの記述からも分かる通り，チケットが売り切れることはおろか，当日無料券配布が行われていた会場が多々あったこと，東南アジアにおいて競泳の人気はとて高いとは言えないことから，競泳も同様の方式で会場に入ることができるだろうと高をくくっていたが，なんとその日の競泳会場のチケットはすべてソールドアウトであった。それはおそらく，客席数が少なかったことに加え，シンガポール初，かつ東南アジア初のオリンピック競泳種目の金メダリストであるジョセフ・スクーリング選手がその日のレースに出場していたことが原因であったように思える。こうして競泳の観戦断念を余儀なくされ，一旦宿泊先へ戻り，野球・ソフトボールの会場へ向かった。

野球・ソフトボールが行われたThe Villagesは，クラークフリーポートゾーン(クラーク経済特区)内に位置する，スポーツコンプレックスや宿泊施設を有する複合施設である。その敷地面積は60ヘクタールにも及ぶ。この広大なスポーツコンプレックスは野球・ソフトボールに限らず，ビーチバレーボールやロードレース，アルティメットの大会の開催や，サッカーチームの合宿地としても使用されている。

宿泊先から現地へ向かうに当たり，交通手段を



写真14 無料配布されたチケット

模索したが、NCCSにあったような市街地と会場とを結ぶシャトルバスは存在していなかったため、多少の不安はあったものの、東南アジアを中心に展開されている配車アプリ、Glabを利用して現地へ向かった。道中、運転手の方に、「こんなところでsea gamesなんかやっていないよ」、「本当にここで合っているのか?」、「sea gamesの会場はNCCSだけだよ」と何度も言われたが、大会のホームページに載っているのだから間違いないと説得し、なんとか会場にたどり着くことができた。

会場に到着すると、例のごとくチケットが無料配布されており、スムーズに会場に入ることができた。The Villagesは合計8面の野球・ソフトボールフィールドを有しており、うち2面はMLB規格の野球専用フィールドである。この2つのフィールドでは野球、その他の6面では男女ソフトボールが各2面、残りの2面はウォーミングアップ

会場といった具合で使用されていた。

会場では、野球（フィリピン対インドネシア）、ソフトボール女子（インドネシア対シンガポール）を観戦した。野球については、収容人数の少ない仮設の観客席が設置され、空席がかなり目立つ状況ではあったが、開催国の試合であったこともあり、数こそ多くはないが、フィリピンチームの応援団が形成されていたように感じた。ソフトボールについては、関係者や選手を除き、観客は私一人であった。しかしながら、ベンチからの聞こえる応援歌や盛り上がりは日本のそれと通ずるものを感じた。両者ともに、イメージしていた国際大会の雰囲気とは程遠かったが、東南アジアにおいては人気の低い野球・ソフトボールの普及・発展、スポーツを通じた国際交流という点においては一定以上の価値は認められるのではないだろうか。また、既存の施設であるThe Villagesが国際大会で使用されたことは、スポーツ施設としての価値を高めるとともに、今後のプロモーションにも大いに役立つことであろう。

試合観戦外の部分においては、会場にドーピン



写真 15 The Villages



写真 16 試合中

グ関連のスタッフとして派遣されていた知人と会うことができた。知人によると、審判やドーピングといった専門的な知識と経験、あるいは資格が必要なポジションになればなるほど東南アジア外から派遣されるスタッフが多く、正確な数は残念ながら把握できていないが、日本からもかなり多くのスタッフ（指導者含む）が派遣されていたようである。

（文責：神田）

リサールメモリアルスポーツコンプレックス (12/7)

最終日となったこの日、メトロ・マニラに先に戻ってきた富田と尾川は、リサールメモリアルスポーツコンプレックス（以下RMSC）を訪れた。RMSCはメトロ・マニラのマラテにある。1934年にマニラで開催された第10回極東選手権競技大会の会場としても活用され、その後も第2回アジア大会（1954年）、第11回SEA GAMES（1981年）、第16回SEA GAMES（1991年）、第23回SEA GAMES（2005年）の会場となった。RMSCの中には陸上競技場（サッカー場）、野球場、体育館、アリーナ、競泳プール、テニスコート、バドミントンコートなど各種スポーツの施設や、フィリピンスポーツ委員会が置かれている。また第二次世界大戦で戦死したフィリピンアスリートの慰霊盤も設置されている。今回のSEA GAMESでは使用されなかったが、野球場（リサールメモリアルスタジアム）は1934年に建設され



写真17 第二次世界大戦戦没フィリピンアスリート慰霊盤



写真18 リサールメモリアルスタジアム

たもので、同年に極東遠征に来ていたメジャーリーグ選抜が試合を行っている。その足跡は外野のフェンスにある。リサールメモリアルスタジアムではホームランを打つとそれを記念してフェンスに記録を残すこととなっており、1934年12月2日にベーブ・ルースがホームランを打ったことが確認できる。この他、日本人選手ではヤクルトやデビルレイズ、楽天で活躍した岩村明憲の名前を確認できる。

今回、RMSCではテコンドー、重量挙げ、サッカー、テニス、ソフトテニス、体操の会場となっていた。土曜日ということもあり会場には多くの観客が詰めかけていた。中に入ると、人だかりができておりのぞいて見るとそこにはスーパーマンのコスプレをした男性が参加各国の国旗が描かれた旗を持ってパフォーマンスをしたり観客と記念



写真 19 コスプレ男性との撮影会



写真 20 新体操競技会場

撮影をしていた。われわれは新体操の観戦のためにリサールメモリアルコロシアムへと足を運んだ。すると入口でスタッフがなにかを配布していた。事情を知らぬまま受け取るとそれは入場チケットであった。esportsの会場同様に入場チケットは無料で配られていたのである。会場に入ると四方の内、三方が観客席として準備されていた。当然ながらフィリピンの選手に対する観戦がひときわ大きく駆け付けた観客の多くはフィリピン人であるようだが、タイやマレーシアから駆け付けたと思われる団体がそれぞれ会場の一角を占めて国旗を振り、声を挙げて応援をしている様子も見る事ができた。率直にこれまでの中で一番国際大会らしい様相を見せていたのがこのRSMCであった。

（文責：富田）

おわりに

以上、ごく一部ではあるがSEA GAMESの視察報告である。現地新聞では2030年のアジア競技大会招致が報道されており、もし決まれば今大

会で使用された多くの会場が舞台となると思われる。古くからある都市の施設と新設された地方の施設、それぞれの今後にも注目したい。

注および引用参考文献

- 1) ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、東ティモール、ベトナム
- 2) SEA GAMES 2019 公式サイト <https://www.2019seagames.com/we-win-as-one/> 及び、OLYMPIC COUNCIL ASIA <http://www.ocasia.org/Game/GHAFDetails?q=NtpwTOliip-Dwo6ShqBnES6Hu2rKNoep1wiQPWHLIZP-pcQURNk2GfMVLfUe2HxIbgBIMTBdo6hoL+jQCwdH6NRA==> を参照。

（閲覧日 2019年12月18日）

- 3) Min-Liang Tan による 2018年11月20日の投稿 (Facebook)
- 4) APP ANNIE の ios 及び Google Play のトップアプリチャートのトップセールスを参照 (2019年12月4日付) https://www.appannie.com/apps/ios/top-chart/?country=PH&category=36&device=iphone&date=2019-12-04&feed=All&rank_sorting_type=rank&page_number=0&page_size=100&table_selections=及び https://www.appannie.com/apps/google-play/top-chart/?country=PH&category=1&device=&date=2019-12-04&feed=All&rank_sorting_type=rank&page_number=0&page_size=100

（2019年12月20日）

- 5) 「猫ひろしさん、東京五輪に黄信号 東南アジア大会で失速」『朝日新聞』2019年12月6日、朝日新聞デジタル、<https://www.asahi.com/articles/ASMD57VQ0MD5UHBI02L.html>

